
最後に笑うのは誰だ

小湊茉莉絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後に笑うのは誰だ

【コード】

N0105U

【作者名】

小淵茉莉絵

【あらすじ】

世界的大企業・土屋家の当主争い。

恋愛もありますが、基本ドロドロかも…

最初の最初

某都市に、土屋 という地名がある。

それは、その通りすべて、“土屋”という200名の一族が住んでいるからだ。

一族は山にある本家を頼りに生活している。

なぜなら土屋は一族経営の、世界に通じる巨大会社であるからだ。給料は各家庭に、毎月配布され、それで生きている。

近くの病院も本屋もコンビニも一族で、学生はそこでバイトして、ただでさえ高いこづかいを稼いでいる。

本家は、主に会社の重役で、一般企業の上層部以上の給料をもらっている。

それを引いた利益を、一族に回しているのだ。

ちなみに、分家の優秀な人物の、秘書まで付いている。

まるでひとつの世界だ。

しかし、そんな本家にはヒミツがある。

「流星、そろそろ本家と分家代表の会議、始まるわよ。」

呼ばれた男性は、土屋本家に伝わる古い着物を着て、女性の方を向

いた。

彼は土屋流星。土屋当主の長男で、土屋グループの次期社長である。

「朱音……健太郎は来てるのか？」

朱音は、有名大学をトップの成績で卒業し、異例の速さで次期当主の秘書になった逸材だ。

「当たり前じゃない。また喧嘩すんじゃないわよ。」

こんなに碎けたしゃべりは、本来禁物だ。

でも、ここは2人だけ。

それに……

「朱音……」

「ン……キスは、会議終わってからね。」

「意地悪だな。」

「真面目なだけよ。」

そういう関係、だったから。

土屋流星

土屋朱音

土屋健太郎

土屋英

これから、ヒミツの物語が始まる

他の最初（前書き）

コブクロのファンの方、御免なさい!!
名前がカッコよくて…
コビイ最高!

他の最初

これは、使命？

『いい健太郎……あなたはこの世界的企業の当主になるのよ？』
『当主……』

『そう……あいつの息子になんか、負けないのよ？勿論、力もね。』

当主に……

違うよ母さん

俺が

俺が言っただけ欲しいのは……！

「！」
「！」

まるで走ったかのような息切れをして、健太郎は目覚めた。
嫌な夢だ。

健太郎が一番嫌う、子供のころの母の遺言。

「あいつの息子、か……」

力も勝て、と言われた。

母は、母の姉の家族が大嫌いだった。

なんというか、姉にコンプレックスがあったらしい。

勝気な母は、どうしても姉に勝ちたかった。

息子と……この家に伝わる不思議な力を頼ってまで。

「坊ちやま。」

ふすまの外から声がした。

お手伝いだ。代々土屋家に仕えている。

お手伝いも、おもてなしの心を本家に持ち、働いている。

そう、健太郎も本家の敷地に住んでいる。

それなりに身分は高いが、離れにだ。

「なんだよ……」

「本日は会議でございます。」

「ああ……」

両親は、死んでいる。

だから、この家を代表するのは、健太郎だ。

「行かなきゃなんねーのか？」

「健太郎さまがこの家の代表故……雅奥様からぞ」

「その名前を出すな!!」

「は、はい、申し訳ございません!」

「朝飯はいらぬ。すぐに行く。」

健太郎は、さつと着物を着ると、窓を開け、空を見る。
真っ青だ。

自分の心のようにだ。

「ふん……アイツの好きにはさせない。英も動いてること……知ってるか?流星。」

健太郎は、そう呟いて、家を出た。

きっかけの集会1（前書き）

お久しぶりです…！覚えてますか？
感想プリーズ！

きつかけの集会1

「それでは、今月の集会を始めます。」

土屋家では毎月1回、本家と分家代表が集まり、企業や一族をまとめる集会を行う。

本家の言う事は絶対。そして、会社をまとめる重要な会議だ。その司会を、次期社長である社長の息子が行う。

「まずは、今月の会計報告から……」

本家敷地内の大きな屋敷。一番前で分家代表を見るようにいる本家関係者。

それを見る、核家族化した分家の代表約五十。

そして、何故か本家側にいる、健太郎。ちなみに流星の母・恵知も夫である流星の父・葵のそばにいる。

昔の日本のように、土屋一族は男尊女卑だ。しかし、恵知は集会に参加している。その理由は、前当主に、長女である恵知、そして次女である美知しか産まれなかったからである。

前に挙げたように、土屋家は男尊女卑故、次期当主は当主の長男しか継げない。そういうしきたりある。

焦った本家は、分家で一番、俗に言うデキル男を恵知に嫁がせたのだ。美知は一般男性と結婚した。

よって”当主の血をひく分家”となり、五十ある分家のトップに君臨した美知だが、表向きにも成功している姉に嫉妬し、ノイローゼ

状態になり死んでしまった。

更に、分家当主である健太郎の父も死んでいる……
故に、分家当主の息子であり、一番高貴な分家の健太郎も、その位置にいるのだ。

『闇の……出番だ。見ている、流星。』

健太郎の含み笑いに、土屋家最高の当主になるだろうと謳われる流星や、そんな息子を持ち、鼻高々の恵知や夫であり土屋家当主の父、そして主席側近であり恋人の朱音は気付かない

「まずは、当主の挨拶」

「ちよつと待った！」

秘密

集会はいつも当主（といっても、現当主はほぼ雅に操作されているが）から始まるが、それを阻む声が聞こえた。

健太郎だ。

「また、お前か。」

「またはねえだろうよオ、次期当主のりゅーせーさん。」

母親たちがそうであったように、息子たちも犬猿の仲だ。先の朱音の、流星に対する注意でわかるだろう。

片や当主の息子。

片やそれを憎む後継二位。

健太郎は、集会の度に流星と対決をし、それに勝つことで流星を次期当主の座から引きずり落とそうとしていた。土屋の学は、勿論他と比べれば高いが、その中でも健太郎は単細胞……と言っては彼に失礼だが。

「なんだ、また勝負か。何を何度やっても俺のが上！実際お前もそれで大怪我して、入院したじゃないか。」

「お前だつてその綺麗なツラに傷つけられて先生に大手術したそうじゃないか。朱音、そうだろ？」

「さあ？」

朱音が、アメリカのコント番組で見るとなリアクションを見せてる。

「夫婦そろつて嘘つきか。よっしゃ流星！勝負だ！朱音、今度は手えだすなよ！」

「おい、健太郎……！」

健太郎の周りが歪む。

これこそ、土屋一族が守り抜き、秘めてきた力……

“
属魔法
”

きつかけの後

「それで、死んだのね？朱音。」

集会翌日。本家母屋。当主とその妻・成人していない当主夫婦の子供が住む所だ。当主と次期社長の秘書の職場もここにある。ちなみに当主の子供は成人したら本家敷地内にある別の建物に住むのがしきたりになっている。

「はい……社長。恵知奥様。」

「恵知……やっぱ英を許してやってくれないか。健太郎の属魔法で使用人も死んだことだし、ここは、丸く……」

「何をお考えですか！何のために、たかだか分家の貴方と結婚などしたとお思いなんですか。英を認めたのも、隠してきたのも私の寛容な心のおかげでしょう。」

「そ、そうか……」

おかしい……恵知の言葉をそう感じた朱音は、「では」と言って夫婦の間を去った。

恵知の言っていることは、どこか正しくて、どこかおかしい。要するに、自分の亭主をたてておきながら、馬鹿にしている。

この女性の性格からして分からなくもないが、結婚を望んだのは自分では？と思う。

自分と流星では、難しいことだから。

『いつも思っけれど……』

“英”って、何者？

「浮かない顔だな、朱音。」

母屋の廊下歩き、流星のいる事務所に移動しようとした朱音は、有り得ない人物に声をかけられた。

「健太郎……」

「呼び捨てか。たかだか秘書の分際で、当主の俺に。」

「分家でしょう。傷も痛々しいわね。包帯が似合う。」

「頭のいいヤツは、これだから腹が立つ。」

本家母屋は、代々守衛を務める分家の許可がないと入れない。たとえばそれが、次期当主の流星であったり、秘書の朱音であったり、長年仕える使用人であったりするので、何故か離れに住む健太郎はさすがに門前払いのはず……朱音はそう解釈していた。実際、ここで健太郎と会うのは、初めてである。

「貴方も火系。流星も火系。流星の方が、力が勝っているのは、日々修行している貴方でも、分かった事でしょうに。」

「オンナ心と秋の空。」

「使い方がおかしい。」

「言ってくれんじやん。なんなら、昨日のクソ使用人のようにしてやるつか？朱音。」

朱音は、目を見開いた。

きっかけの集会2（前書き）

（きっかけの集会1にも述べましたが）

月に1度の集会で、またしても流星にケンカをしかけた健太郎。

その翌日、本家の母屋で朱音にまで挑発をし、おさまりかけた怒りが、またこみあげてきた朱音。

あの日、一体何があったのか……

きっかけの集会2

「おい、健太郎……！」

「行くぞ！」

健太郎がそういうと、健太郎の右手に炎に燃える赤い剣が浮き出た。

“炎の剣”。

「まったく、何度やっても分からない奴だな……！」

応戦するような態勢をもった流星。今度はその片手に火の玉がと
もされる。

“炎の爆弾”

「な、何を始めるんだ、流星！止めるんだ、朱音！」

「は、はい社ちょ……！」

「やめなさい、朱音！」

朱音が手をかざす数秒前。恵知が朱音のそれを制止した。葵はそれにびくりとし、同じく本家側に座っていた人間も、驚いて恵知を見る。

当の本人たちは、力を使って戦っている。喧嘩ではない。そこには生死がかかっている。

名門土屋家に引き継がれる、炎・水・土・救急・創造の五種の“属魔法”：国の要人と土屋家本家しか知らない、不思議な力。その昔、万物を創造した神が、世界構築を手伝った褒美に与えられた、と、古い古文書に書いてあるが、定かではない。

ただ、その力はある、それが真実だ。

「属魔法は、高貴なものにしか与えられない不思議な力……旦那様は分家の出ですから、あまりご理解頂けないでしょうが、この力を持ってさえいれば、土屋の名で世界征服だって夢じゃありませんの。やっておしまい、流星。禍々しいその馬鹿君を、殺すのよ。」

恵知が、悪女がやるような高笑いをすると、葵や朱音も席に戻る。当主の葵でさえ、純血の恵知にはかなわないのだ。

母親の命も受けたことだし……と、流星の目が変わり、まるで戦隊モノのように、瞬間移動をしたり、火の玉で殴ったりと、名家の坊ちゃまらしからぬ戦いぶりで、健太郎をおしている。剣で応戦する健太郎は、なんとか流星の攻撃をかわしている。攻撃のタイミング

を狙っているようだ。

しかし、圧倒的有利は流星。

「やっぱり、分家の犬より、流星の方が上回っているみたいね。」
と、恵知が解説。

「これで……終わりだ！」

と、流星が最後のボディーを入れようとした瞬間だ。

「旦那さま！」

健太郎の前で、着物姿の女性が盾になる。

「ば、ババア……?!」

「なっ……」

「流星！」

朱音の大声も、届かず。というより止められなかったのが現状か。
健太郎の、使用人だ。

「……あ、あ、あ、あ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0105u/>

最後に笑うのは誰だ

2012年1月14日13時51分発行